

岩手県訪問について

実施日 平成29年8月28日（月）から8月29日（火）

研修先について

(1) 大槌保育園 園長 八木澤 弓美子氏



八木澤先生は、3月11日の地震の津波から、園児約30名を無事に避難させた園長先生。

地震の前から、町役場、消防、近隣の方々に相談をして、国道沿いの小高い丘にあるコンビニを避難場所とした。町の指定避難所は空き地で寒さをしのぐ建物がないためである。保育園は、津波浸水想定区域のぎりぎり外にあるこのコンビニを独自の避難場所と決めていた。

園長はコンビニ店内で、迎えに来た親に園児のうち約70人を引き渡し、外を見た。「家の屋根をたくさん浮かべた高い波」が迫ってきた。「怖い、怖い」と泣きじゃくる園児ら。覚悟を決めた。「山に逃げよう。先生のそばにいれば大丈夫」。

国道は市街地から逃げる人や車で大渋滞。園長は、1歳から年長まで残っていた園児30人を散歩用の台車に乗せて車道を駆け上がり約300メートル先の山のふもとへ。近くのスーパー従業員約30人も避難していた。

生徒と話し合った内容

- ① 訓練において、抜き打ち避難訓練を実施していた。食事中、昼寝中と先生方が一番嫌がる時間帯を設定した。一回目の訓練では、先生たちもパニックになったが、反省会を実施し、役割分担を行ったり、日頃から持ち出すものを整理したりした。2回目は訓練では、落ち着いて対応できた。その1ヵ月後に地震が起きた。2回の経験が生きた。日頃からの備えと訓練の重要性を感じた。
- ② 70人を保護者に引渡し、その何人かが津波の被害にあい亡くなった。あのときに、保護者に引き渡さなければ助かったかもしれない。自問自答し、仕事を辞めようと考えた。誰も経験したことがない大きな災害であり、今でも何が正解だったのか分からないという言葉が印象的で、きっと園長の立場

なら引き渡していたと思う。この教訓をもとに、各地では、引渡しに関わるルールが確立した。

③ 津波てんでんこ、それぞれがバラバラに自分の判断で避難するという、この地方の言い伝え、一見すると冷たい言葉だが、日頃から家族で話し合い災害のあとに集結する場所を決めておく、それぞれが家族を信じ、決して家には戻らない。究極の集団行動であるが理解できた。

④ まずは、自分の命を守る。ゆとりがあったら、人を助ける。実体験から出る言葉は、心にしみた。しかし、津波に流される中、助けを求められたが、それを振り払い避難した人たちは、長い間苦しんでいるとのこと。自分たちにそのような判断ができるかは疑問であると思った。

(2) 遠野まごころネット 理事長 臼澤 良一

大槌町の町の現状を知るため、城山公園から町を見学させてもらった。ここは、地震の当日に町民が避難した高台である。

町は、まだまだ復興の途中で、かさ上げ工事が行われていた。町に唯一残る震災のあとは、町役場である当時のまま保存されており、津波の威力が理解できた。



また、見学の途中に、大槌商工会に寄っていただき、大槌町の雇用の問題等について、主任の若生剛様よりお話をいただいた。

商工会の会員数は、震災前と比較し、減少したが、少しずつ増加している。ただ、今後は後継者の問題に直面し減少していくことが予想される。若い世代は、他の町に移住してしまい、別の仕事を始めている。明るいニュースとしては、ボランティアなどで訪れ、大槌を気に入る。他の地区から移住し、商店を始めた人たちもいる。

企業誘致をしたが、働き手がいないため、求人が埋まらない。良い人材を確保するため、労働者の取り合いとなっており、給与が高騰している。そのため、地元の企業は、大手に対抗できず苦勞している。復興に6年もの月日を費やしたことが、人口流出の大きな原因であると感じた。

遠野まごころネットは、平成23年3月11日に発生した東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者の方々を支援するべく、遠野市民を中心として結成された被災地支援団体です。

発災当初は、瓦礫撤去や物資配布、炊き出しといった緊急支援を実施していた。現在は、復興に向け様々なプロジェクトを実施している。

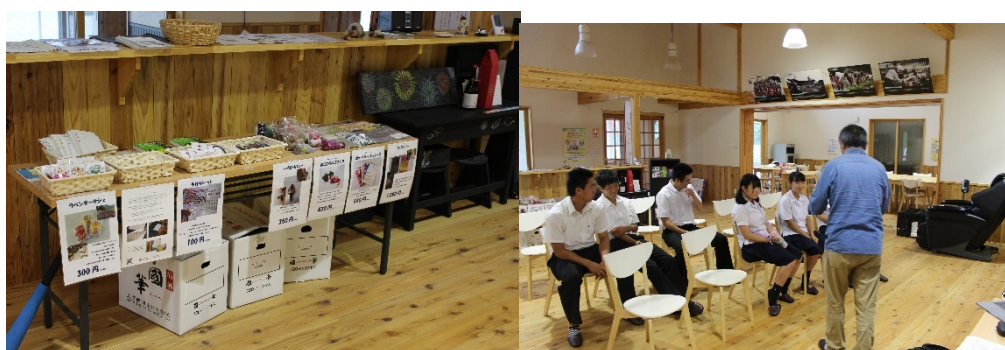
①まごころの郷

イオンの支援を受け、ハーブやブドウなどの栽培と商品化を通して、コミュニティづくりと「なりわい」づくりを行っている。

一過性のものではなく、地元で根付かせることを目的としている。

②大槌たすけあいセンター

コミュニティの不全、求人と求職のミスマッチ、産業の衰退といった問題に取り組むため、遠野まごころネットが開設する施設。コミュニティースペース・工房・食堂・カフェ・加工場・等々を配置し、雇用を産み、地域の自治機能を取り戻し、地域の再生と振興を多方面から図っている。



(3) 山田町教育委員会 白土靖行 (元山田町防災対策室長)

私たちが岩手を訪れていることを知り、急遽、隣町山田町から大槌町に訪問していただいた。白土さんは、震災当時は、山田町防災のトップとして業務を行った。生徒たちに、山田町の震災の資料をいただいた。

生徒たちに、「まずは自分の命を守ること。家族を信じて懸命に避難すること。」など震災での経験をお話いただいた。

まとめ

実際に現地での研修を通して、津波災害の特徴が理解できた。また、避難方法や日頃の備えについても理解が深まった。さらに、実際に被災した方々からの体験談は、貴重な経験となった。なによりも一人ひとりの方々の言葉に重みを感じた。

遠野まごころネットでは、「なりわいをつくり雇用を生み出したい。」「地域を持続するための地域ブランド作りをしたい。」というコンセプトのもとで商品開発を行っている。

地域の社会的問題を解決し、接続可能な地域活性化をめざし、地域に雇用を生み出すことを目的としている。この活動は、ボランティアではなく、ビジネスの観点から地域を活性化させ、産業を地域に根付かせたいということが理解できた。